

水戸芸術館 ACM 劇場プロデュース
未来サポートプロジェクト vol.13

海辺の鉄道め話

うみべのてつどうのはなし







ひたちなか市内を走る全長14・3キロの小さな鉄道。

「ひたちなか海浜鉄道湊線」。

この鉄道は、10年前、廃線の危機に瀕し、沿線住民からの熱い後押しを受けて

第三セクターとして再出発しました。

けれど、それから10年も

かけて順風満帆とは言えませんでした。

資金難、震災・・・

「もうダメだ！」と誰もが思った危機を、

働くひとたちや沿線のひとたち、

2匹の駅猫「おさむ」と「ミニさむ」、

みんなで力を合わせて乗り越えてきました。

私たちのすぐ近くで、

これまでにどんなことがあり、

これからどんなことが

起きようとしているのでしょうか。

『海辺の鉄道の話』は、

生まれ変わろうとしている鉄道と、

その鉄道とともに生きる人々の物語です。

芝居の効能

水戸芸術館ACM劇場 芸術監督 井上 桂

芝居には、薬で言うところの効能があるとしたら、どんなものなんだろうとよく考えます。ある演出家が言っていました。「演劇は、人類が持っている記憶の再生装置の一つなんだ。血や汗、時に命と引き換えに学んだ教訓を舞台上で再現し、その教訓を色褪せないものにできるんだ」と。翻ってこの『海辺の鉄道の話』を見ると、劇作家の詩森さんらしい切り口で、行政と企業と地域の人々の、ある出会いと活動が時に楽しく時に哀切をもって描かれています。この十年を振り返りつつお楽しみいただければ幸いです。

この作品は、お芝居という形こそ取っていますが、必死に生きた人たちのルポルタージュでもあれば、ある取り組みの成功例の再生でもあり、ある立場の人にとっては既にありがたい参考資料やマニュアルなのかもしれません。詩森さんは、二年にわたる取材の末にこの物語を作って下さいました。詩森さんご自身が感じた感動だけでなく、ある種の分析がふんだんに盛り込まれ、当事者たちですら気が付かなかった広がりもわかる作品になっています。

どうやらこの作品は「教訓を色褪せさせない」どころか、これから迎える厳しい時代に立ち向かう時、私たちの進むべき方向を照らしてくれるナビゲーター機能がついているようです。それは、長きにわたり作品に取り組んでくださった詩森ろばさんはじめ、スタッフキャストの皆様、ご協力いただきましたひたちなか海浜鉄道、おらが湊鐵道応援団の皆様がいらっしゃればこそ生まれたものと確信しています。改めてご協力いただいた皆様に厚く感謝いたします。

そして地域で日々頑張っている皆さんに、こんな寄り添い方も出来る演劇が受け入れていただけたら、これにすぐる喜びはありません。本日はご来場ありがとうございました。

「地域とローカル鉄道の活性化」の具現化

地域の足としてひたちなか市内を100年近く走りつづけたローカル鉄道「湊線」。

マイカーの普及によりお客さまが激減、経営が立ち行かなくなり、2008年3月いっばいでの廃止が検討されました。

でも、鉄道は地域にとって大切な輸送手段。そして沿線の元気の源としても大切な存在です。

話し合いの結果、市民と行政と会社が一致団結して湊線を引き継ぐこととなり、2008年4月1日、第3セクター「ひたちなか海浜鉄道」が誕生しました。

それから10年、市民を始め全国のみなさんの応援、ひたちなか市や国・県のサポートもあり、2017年度には、単年度黒字を計上、70万人だった年間のお客さまの数も初めて100万人を超えました。

こんなひたちなか海浜鉄道のこれまでを舞台化したいとお話をいただきました。

当事者にとっては、なぜ舞台化されるのか不思議なローカルで地味なお話。

が、お話を聞き、稽古を見学させていただくうちに、見過ごしていた素晴らしさやまわりの応援に気づかされ、これこそ私たちの目指す「地域とローカル鉄道の活性化」の具現化そのものだ、と強い驚きと感動を感じるようになりました。

「舞台の素晴らしさに引き込まれながら、自分たちの住むまちをもっともっと元気にしたい。」

そんな皆さんに、最高のテキストとなることと確信します。

モデルとしては、いささか面映ゆいところもありますが、

ぜひ感動を分かち合い、元気の素をお持ち帰りいただければ。

ひたちなか海浜鉄道株式会社
取締役社長 吉田千秋



水戸芸術館演劇部門 芸術監督の井上桂さんからこのお話を聞いたときに、書きたい話、書けたらいいなと思っていた話、書くべき話、ぜんぶが詰まっていると思いました。書きたい話であることはとても大切ですが、その物語が、「いまここにある意味」というのは、それだけでは創ることができません。ひたちなか海浜鉄道という14.3キロの小さな小さな鉄道が、なぜこの場所にあり続けなければならないか、それは、この演劇を作る意味そのものでした。

それは大きな言い方をすれば、いまの社会が必要としているものがある場所だということです。車中心の社会で、車を持たない、もしくは運転できないひとたちの移動の手段であると同時に、地域のひとたちの居場所となり、そして、繋がりまでも作っていく。こんなことができるんだなあ、と取材帰りの常磐線のなか、今日聞かせてもらった話をヘッドホンで聞き返しながら、何度心のなかで呟いたかわかりません。

稽古の途中には、湊線を襲った震災のように、信頼しきっていた俳優の病気による降板というできごともありました。しかし新しく来ていただいた俳優が、その穴を埋めてくれたばかりか、さらに3.1キロの延伸を目指す力となってくれました。

さて、開演です。この14.3キロのなかに、これからわたしたちが幸福に生きていくための種がたくさん詰まっています。その種が、お客さまがお芝居を見て帰る道々、心のなかで、小さな芽を出してくれたなら、この鉄道に励まされてきた2年間の恩返しになると思っています。いつか殿山駅のハマギクのような、可憐な花を咲かせますように。

末筆ですが、西日本での度重なる豪雨や台風による被害。そして北海道の震災という胸痛むできごとが続きました。そのなかで、この物語を作り、演じます。せめてたくさんの祈りをこの演劇に託します。

ではごゆっくりお楽しみください。



詩森ろば(風琴工房 改め シリアルナンバー[serial number])

宮城県出身。1993年劇団風琴工房旗揚げ。以後すべての脚本と演出を担当。2018年からは詩森ろば(劇作家・演出家)と田島亮(俳優)のふたりユニット、シリアルナンバー(serial number)として活動。'16年、『残花』(製作:いわてアートサポートセンター)と『insider』により、紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。本年3月『アンネの日』その他により、芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。本年10月に劇団朋友「残の島」(俳優座劇場-作品提供)、12月にserial number「アトムの日」(下北沢ザ・スズナリ)で作・演出する。

シリアルナンバー(serial number)公式 <https://serialnumber.jp/>

CAST PROFILE



春海四方 HARUMI Shihou

1959年、東京都生まれ。一世風靡セピアを経て、数多くの舞台、映像作品に出演。近年の主な出演作は、舞台『9 days Queen ～九日間の女王』『抜目のない未亡人』『ジャンヌ・ダルク』『藪原検校』『草枕』『アルカディア』『あわれ彼女は娼婦』『エノケソー代記』『子供の事情』など。テレビドラマ『隣の家族は青く見える』『アンナチュラル』『もみ消して冬～わが家の問題なかったことに～』、映画『神様はバリにいる』『関ヶ原』など。水戸芸術館ACM劇場プロデュースでは『ジュリアス・シーザー』(2006年)で主演を務めた。



杉木隆幸 SUGIKI Takayuki

富山県出身。茨城大学教育学部卒業。在学中より演劇をはじめ卒業後に上京。小劇場を中心に活動。2013年9月『hedge』より風琴工房に参加。主な出演団体は、風琴工房『penalty killing -remix ver.-』、『ちゅらと修羅』、serial number『ROBOTA』、流山児★事務所『OKINAWA1972』、鶴の『悪魔を汚せ』など。本年10月オフィスコトナー『山の声—ある登山者の』(Space早稲田)、12月にserial number『アトムが来た日』(下北沢ザ・スズナリ)に出演。



酒巻誉洋 SAKAMAKI Takahiro

群馬県出身。2001年に日本映画学校(現、日本映画大学)俳優科を卒業後、役者として様々な舞台、映像作品に出演。主な出演作は、風琴工房『国語の時間』、『penalty killing -remix ver.-』、いわてアートサポートセンター『残花』、流山児★事務所『OKINAWA 1972』、A.C.O.A『熊／霧笛』、serial number『nursery』など。緻密な会話劇からパフォーマンス色の強い抽象劇まで活躍の幅は広く、演出家としての顔も持つ。本年12月serial number『アトムが来た日』(下北沢ザ・スズナリ)に出演。



佐野功 SANO Isao

福岡県出身。桜美林大学在学中は平田オリザに師事。殺陣師としても活動中。神保町花月第四回エチューングランプリ MVP受賞。近年は、ほとんどの風琴工房作品に出演。風琴工房『4センチメートル』『insider -hedge2-』『penalty killing -remix ver.-』、serial number『next move』、柿喰う客『真説・多い日も安心』、DULL-COLORED POP『くろねこちゃんとページョ猫ちゃん』、クロジ『きんとと』、NHK大河ドラマ『真田丸』(蜂須賀家政役)など。本年12月serial number『アトムが来た日』(下北沢ザ・スズナリ)に出演。



田島亮 TAJIMA Ryo

埼玉出身。熊林高弘演出『いさかい』でデビュー。蛭川幸雄演出『ヘンリー六世』『じゃじゃ馬馴らし』『血の婚礼』、白井晃演出『中国の不思議な役人』、ダニエル・カトナー演出『みんな我が子』等に出演。2018年、詩森ろばとのふたりユニット、serial numberとして活動スタート。本年10月フジオモラル破局公演『アンチカンボウ・オペレーション』(花まる学習会王子小劇場)、12月serial number『アトムが来た日』(下北沢ザ・スズナリ)に出演。



高畑こと美 TAKAHATA Kotomi

東京都出身。日本大学芸術学部卒業。大学卒業後、鄭義信作演出の舞台『鴨川ホルモー』でデビュー後、舞台を中心に活動中。主な出演作に、こまつ座『日本人のへそ』、加藤健一事務所『Be My Baby』、ウォーキングスタッフプロデュース『304』、オフィス3〇〇『川を渡る夏』、NHK大河ドラマ『軍師官兵衛』など。水戸芸術館ACM劇場には、『キャッシュオンデリバリー』以来二度目の登場。



八幡みゆき YAHATA Miyuki

熊本県出身。日本大学芸術学部演劇学科卒業。新国立劇場演劇研修所第9期生。舞台を中心に映像などでも活躍中。近年の主な出演作は、Buzz Fest Theater『裏の泪と表の雨』(作・演出:コウカズヤ)、ラッパ屋『父の黒歴史』(作・演出:鈴木聡)、『関数ドミノ』(作:前川知大 演出:寺十吾)、こまつ座第116回公演『私はだれでしょう』(作:井上ひさし 演出:栗山民也)など。



白井風菜 SHIRAI Funa

静岡県出身。高校演劇出身で、穂の国とよはし芸術劇場PLATの「高校生と創る演劇」シリーズ第2弾『赤鬼』(作:野田秀樹作、演出:黒澤世莉)での女役を演じる。2016年より上京。詩森作品は2017年『ちゅらと修羅』に続き二度目の出演。



椎名一浩 SHIINA Kazuhiro

フィリピン共和国出身。新国立劇場演劇研修所第11期生。主な出演作に、新国立劇場演劇研修所公演『少年口伝隊一九五四』(作:井上ひさし 演出:栗山民也)、『美しい日々』(演出:宮田慶子)。特技:タガログ語、歌唱、料理、裁縫。本年11月劇団た組第17回公演『貴方なら生き残れるわ』(作・演出:加藤拓也)、2019年2月劇団DULL-COLORED POP第19回本公演『あつまれ!「くろねこちゃんとページユネこちゃん」まつり』(作:谷賢一 演出:東谷英人)に出演。



橋本昭博 HASHIMOTO Akihiro

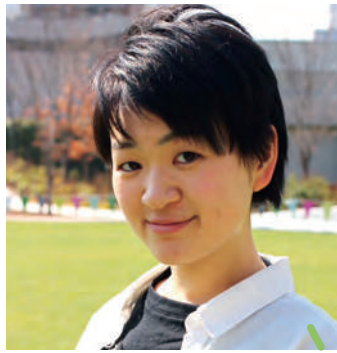
茨城県ひたちなか市出身。俳優・演出家・振付家。12歳で初舞台を踏み、2011年、演劇プロデュースユニットMoratorium Pantsを旗揚げ。全作品のプロデュース・演出を手がける。詩人の谷川俊太郎の作品を上演し対談も行うなど、演劇の新しい可能性を追求している。水戸芸術館ACM劇場には'15年『十二夜』、'16年『夜のピクニック』に続いての出演。'19年3月には、穂の国とよはし芸術劇場PLAT「2018年度 市民と創造する演劇」でシェイクスピア『リア王』の演出を担当する。



茨城出身!

篠原立 SHINOHARA Ryo

茨城県水戸市出身。幼少の頃から子役としてテレビなどに出演し、近年は2.5次元ミュージカルを中心に活躍している。水戸芸術館子供演劇アカデミーの参加者で、アカデミー参加後はじめてのACM劇場での舞台出演となる。主な出演作品に『テニスの王子様3rd season』、『BRAVE10～燭～』(弁丸役)、タイプスプロデュース『マクベス』、水戸芸術館子供演劇アカデミー『星の下、青い夜の王国』、松永一哉プロデュース公演『Midnight Traveller』など。



茨城出身!

杉山文乃 SUGIYAMA Ayano

茨城県茨城町出身。中学生の時に水戸芸術館の水戸子供演劇アカデミーに参加し、初めて演劇に触れる。水戸女子高校在学中には水戸芸術館プロデュース公演、音楽劇『星の王子さま』(作・演出:青木豪)などに参加。また、水戸ドラマスタジオの公演にも参加。2018年3月舞台芸術学院を卒業。本作が卒業後初めての舞台となる。



塩谷亮 SHIOTANI Ryo

水戸芸術館専属劇団ACM所属。北海道出身。1992年～2004年劇団ACMに在籍。07年再入団し現在に至る。多くのACM劇場プロデュース公演に出演している。近年の外部出演に、ぬいぐるみハンター『ゴミくずちゃん可愛い』('18)などがある。ACM劇場主催のワークショップで講師を務める他、県内の図書館や読み聞かせグループとのコラボレーション、近隣図書館での朗読会、幼稚園や小学校への訪問公演なども積極的に行なっている。水戸子どもミュージカルスクール演技コーチ。茨城キリスト教大学兼任講師。



大内真智 OUCHI Matomo

水戸芸術館専属劇団ACM所属。茨城県水戸市出身。2009年劇団ACM入団。多くのACM劇場プロデュース公演に出演。2011年の震災を機に小林祐介とともに読み聞かせユニット「ゆうくとマットさん」を結成。幼稚園などでの出張読み聞かせ「おはなしキャリアボックス」のほか、「ゆうくとマットさん舞台シリーズ」で子どもも大人も楽しめる舞台作品づくりに力を入れている。本年11月に水戸芸術館ACMファミリーシアター 新作公演『イワンのばか』に出演する。水戸子どもミュージカルスクール演技コーチ。



小林祐介 KOBAYASHI Yusuke

水戸芸術館専属劇団ACM所属。栃木県出身。2004年に劇団ACM入団。2011年の震災を機に大内真智と読み聞かせユニット「ゆうくとマットさん」を結成。幼稚園などでの出張読み聞かせ「おはなしキャリアボックス」のほか、「ゆうくとマットさん舞台シリーズ」で子どもも大人も楽しめる舞台作品づくりに力を入れている。アクアワールド茨城県大洗水族館のショートレナーへの演技指導も担当している。本年11月に水戸芸術館ACMファミリーシアター 新作公演『イワンのばか』に出演する。藝文学苑・水戸教室講師。



【特別出演】

みなと源太 MINATO Genta

ひたちなか市阿字ヶ浦町在住のシンガーソングライター。中学生の時よりギター弾きを始め、2007年サラリーマン時代に『みなと源太』の名で本格的な活動をはじめた。作詞作曲した『季節の風』は、廃線の危機にあった湊線(現在はひたちなか海浜鉄道)の応援ソングとして採用され、『季節の風～ひたちなか海浜鉄道イメージソング～』としてキングレコードよりリリース。これまでの11年間、毎週土曜・日曜に那珂湊駅舎で朝から夕方まで道ゆく人、旅ゆく人にメッセージを込めて歌い続けて来た。その日数は600日を超える。

『海辺の鉄道の話』には、 地域のさまざまな愛がてんこ盛り

今井浩一

Text by IMAI Koichi

申し訳ないが、いきなり脱線する。「ひたちなか海浜鉄道湊線」の物語を舞台化するという制作発表に参加したとき、僕の頭の中に浮かんだのは福岡市を拠点にするギンギラ太陽'sだった。書き始めて、他所のことでやっぱり申し訳ない気持ちになるのだが、そこは『海辺の鉄道の話』に通じる思いを感じたので書かせてほしい。ギンギラ太陽'sは役者が「かぶりモノ」を着け、建物や乗り物などを擬人化したモノを演じる舞台を上演する劇団。地元の流通、交通、お菓子などの業界を取材し、史実に基づいた物語をつくり続けている。多くの百貨店が軒を連ねしのぎを削る九州一の繁華街・天神エリアがどう発展してきたかを描いた『天神開拓史』という名作は、ことあるごとに再演され、いつも笑顔のお客さんで客席はいっぱい。街の財産とも言える作品なのだ。そこにはさまざまな愛が宿っている。

『海辺の鉄道の話』のモデル「ひたちなか海浜鉄道湊線」をいろいろな形で支える人びと — 吉田社長や職員、おらが湊鉄道応援団、移動の足として利用するおじいちゃんおばあちゃんから小さな子供たち — の姿からはやはり愛が伝わってくる。この作品を成功させようとする水戸芸術館のスタッフをはじめ、作・演出の詩森ろば、キャスト、クリエイションチームも、その愛を推進力として作品づくりに臨んでいることだろう。愛を揺りかごに生まれる作品は幸せだ。そして、今日ここに集ったお客様の笑顔を栄養源に、財産になっていくのだ。

水戸芸術館は、地域の公共文化施設としては、先進的な活動をしてきた劇場だ(演劇の話なので劇場と書かせていただく)。そこにはかなりの大英断があったろうが、だからこそ買取だけではなく自主制作機能を重視した劇場が全国に開館していく流れに非常に影響を与えていった。

また話は変わってしまうが、2011年に東日本大震災が起きた。これを契機に、劇場で求められるミッションのひとつとして、“地域”のアーカイブが言われるようになってきた。例えばお祭り。災害だけではない。人生100年時代を迎えようとしているが、少子高齢化によっても、地域の文化の歴史が途切れざるを得なくなっていく。それらは一度途切れてしまうと、復活させるには予想外のパワーを必要とする。その時に劇場でできることは、戯曲や演劇作品として記録し、伝えていくことだ。これは地域の「思い」や「愛」と言い換えることができるかもしれない。それらは紙やデジタルのデータでは伝えきれない、演劇には紙やデジタルのデータでは伝えきれないものを表現する力があるのが素敵だ。



おらが湊鉄道応援団の活動の様子



その一旦を一足先に感じる出来事が、8月29日に行われた出演者らと地元小学生が沿線の町並みを再現した舞台セットをつくるワークショップだ。ここでは、東京からやってきた役者陣に対して、子供たちが先生だった。駅のある町の建物や風景をチームごとにつくるのだが、まもなく閉校してしまう小学校、東日本大震災で流されたカメのモニュメントなどをあえて加えている様子を見てみると、なんだかうれしくなってきた。子供たちの心の中に何か感じるものがあったからこそ選ばれた大事なものだから。そんな思いをたくさん受け取って、役者は『海辺の鉄道の話』の糧としていく。



大勢の市民参加で地域の物語を演劇として上演する劇場は少なくない。しかし、そこではどうしてもクオリティが後回しになってしまう場合が多い。水戸芸術館がつくる“アーカイブもの”、音楽劇『夜のピクニック』(2016)、『斜交～昭和40年のクロスロード』(2017)、そして『海辺の鉄道の話』もそこを担保しようという劇場の姿勢がある。出演するだけではなく、どんな形で市民参加が可能になるかを考えることは、総合芸術としての演劇の本質であり幅の広さにつながっていく。

さっき、アーカイブと書いた。「ひたちなか海浜鉄道湊線」には、よその地域がうらやむ“延伸”という夢がある。『海辺の鉄道の話』はその夢とともに歩み、きっと進化していく。



[地元の題材を舞台化した水戸芸術館ACM劇場プロデュース公演]



2016年 音楽劇「夜のピクニック」

水戸で高校時代を過ごした恩田陸氏が、一昼夜をかけて約70キロを歩く水戸第一高校の伝統行事「歩く会」をモデルに描いた青春小説の名作を、音楽劇として初めて舞台化。

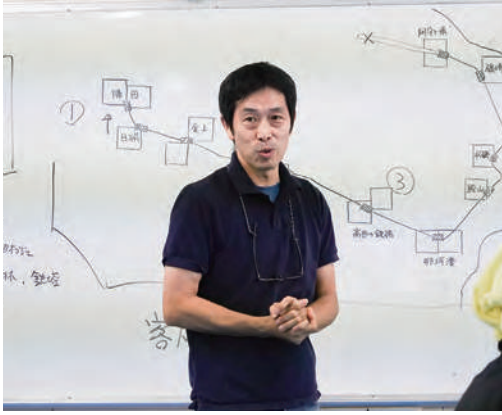
脚本：高橋知伽江 演出：深作健太 音楽：扇谷研人
出演：吉川友、加藤良輔、剣幸、他



2017年 「斜交～昭和40年のクロスロード」

昭和の名刑事・平塚八兵衛(土浦出身)が解決した戦後最大の誘拐事件「吉展ちゃん誘拐事件」に材を取り、刑事と犯人の緊迫感みなぎる取調室最後の10日間を描き話題を呼んだ。

脚本：古川健 演出：高橋正徳
出演：近藤芳正、筑波竜一、中島歩、他











STAFF

作・演出・衣裳：詩森ろば(シリアルナンバー[serial number])

美術：杉山 至

照明：榊 美香 (有限会社アイス)

音響：青木タクヘイ (STAGE OFFICE)

美術助手：谷佳那香

演出助手：内河啓介

舞台監督：小林清孝 (マルーラストaffサービス)

舞台監督助手：佐藤真由美 長久保裕二

照明操作：江森由紀 鹿子沢栄

音響操作：井上佳保

衣裳スタッフ：及川千春 田所莉奈 加藤千晶

大道具製作：六尺堂

舞台美術協力：阿字ヶ浦小学校、平磯小学校の皆さん

劇中歌作曲：内河啓介

タイトルデザイン：小佐原孝幸

宣伝イラスト：スゾアキコ

チラシデザイン：詩森ろば

特設サイト：荻野真衣 (ストロボライツ)

稽古場撮影：刑部アツシ (ロマンティック・フォトスタジオ)



制作：有賀美幸

プロデューサー：本間康太郎 (水戸芸術館)

企画協力：ひたちなか海浜鉄道・おらが湊鉄道応援団

協力：シス・カンパニー ECHOES フォセット・コンセルジュ レトル serial number

ビクターミュージックアーツ スターダス・21 J-beans


水戸ホーリーホック 和奏-wakana みなとWaiWaiクラブ しおかぜみなど

阿字ヶ浦クラブ ひたちなかまちづくり株式会社 JTB 水戸支店

長山泰久 今井浩一 みなと源太&潮騒楽団 みと文化交流プラザ

後援：茨城県 ひたちなか市 ひたちなか商工会議所 水戸商工会議所 茨城新聞社

協賛：トヨタカラー新茨城株式会社 和知商事株式会社

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業) 
独立行政法人日本劇術文化振興会

企画制作：水戸芸術館 ACM 劇場

水戸芸術館演劇部門 芸術監督：井上 桂

制作：櫻井琢郎 菊池広子 宮本晶子

制作アシスタント：比嘉まどか 仲田葉里

主催：公益財団法人水戸市芸術振興財団

Special Thanks (取材にご協力いただいた方)

[ひたちなか海浜鉄道] 吉田千秋 鈴木康夫 中山茂 黒澤正人 大谷俊幸

[おらが湊鉄道応援団] 佐藤彦三郎 伊藤敦之 安富生 星秀憲 みなと源太 船越知弘

[ひたちなか市] 本間源基 村上剛久 小倉健 藤咲裕之 神永明 内藤奈歩

 新しい都市景観創造
和知商事株式会社

トヨタカラー新茨城

ひたちなか海浜鉄道湊線は、
「海辺の鉄道の話」の
モデルとなりました。

舞台となった湊線めぐりは、
湊線1日フリー切符が便利です。

駅ネコ おさむ

★大人 900円

★小人 450円



日、出づる道。

ひたちなか海浜鉄道株式会社



水戸芸術館
ART TOWER MITO

主催：公益財団法人水戸市芸術振興財団

後援：茨城県 ひたちなか市 ひたちなか商工会議所 水戸商工会議所 茨城新聞社

協賛：トヨタカーラ新茨城株式会社 和知商事株式会社

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業)独立行政法人日本劇術文化振興会

